

協働性を高める児童虐待ソーシャルワークに関する研究 ー家族とのゴール共有をあきらめない道程に焦点を当ててー

矢 淵 規 子

Child Protection Social Work to Enhance Collaboration -Focusing on the journey of not giving up on shared goals with families-

Noriko Yabuchi

抄録：

本研究では、児童虐待対応において、市町村子ども家庭相談が行う介入を取り上げ、支援につながりにくい家庭の保護者に対し、協働性を高めるソーシャルワークの方法や展開について明らかにすることを目的とする。研究方法として、サインズ・オブ・セーフティ・アプローチを取入れた実践を行っている市町村子ども家庭相談を担当するソーシャルワーカー5人にインタビュー調査を実施し、質的データ分析法を援用してデータを分析した。その結果、【パートナーシップの構築】、【ストレングスベイスト】、【変化を促す】、【ゴールの共有】、【ネットワーキング】の5つのカテゴリーを生成した。これらのカテゴリーを「協働性を高める5つの要素」と捉え、事例の支援プロセスに沿ってどのように展開されているか検討し、3つの類型「ネグレクトへの対応」、「危機への介入」、「膠着状況の打開」を得た。

考察として、市町村子ども家庭相談における児童虐待対応について、「協働性を高めるためのソーシャルワーク」による変化の構造を提示した。支援につながりにくい家庭にワーカーが働きかけても、拒否や攻撃、衝突といった反応が起きる。これがこれまでの市町村子ども家庭相談における限界と言われてきた様相である。本研究で生成した「協働性を高める5つの要素」を組み合わせた支援を構成することによって、ワーカーと保護者の協働性は高まり、「エンゲージメント」と「つながり」という2つの側面に変化が生じる。

協働性を高めるソーシャルワークによって、諦めていた子どもと家庭が問題解決に向けて共に取り組むこと、虐待の深刻化・長期化を防ぐこと、子どもの安心・安全な生活、子どもと家庭のウェルビーイングの実現が可能となる。ワーカーの実践知を集約し、分析することで、意欲的な取り組みを理論化し、地域での子ども家庭ソーシャルワークの専門性を創り上げていくことが求められている。

キーワード：児童虐待，市町村子ども家庭相談，サインズ・オブ・セーフティ・アプローチ，協働関係，支援につながりにくい家庭，地域支援

Key Words: Child abuse, Uunicipal Child and Family Consultation, Signs of Safety Approach, Collaborative relationships, Families less likely to be connected to support, Support in the community